

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 2007年 春季大会 プログラム

日 時
2007年6月9日(土)



会 場
東京理科大学
野田キャンパス
大講義棟K 702 教室

13:20 ~ 13:50 理事会 (K701 教室)
13:50 ~ 14:10 開会 支部長挨拶・報告

第 I 部

司会 金山 亮太 (新潟大学准教授)

1 研究発表 1 (14:10 ~ 14:50)

大島 カレン (鳥根大学准教授)

『The Muddled State of Education and Relationships in *Hard Times*』

2 研究発表 2 (14:50 ~ 15:30)

加藤 匠 (明治大学非常勤講師)

「『完全なるイギリスの主婦』を目指して

——Our Mutual Friend から考えるディケンズの女性表象——」

*****休 憩*****

第 II 部

司会 松村 豊子 (江戸川大学教授)

1 講演 1 (15:50 ~ 16:40)

松本 靖彦 (東京理科大学准教授)

「ディケンズの速記と人物造形」

2 講演 2 (16:50 ~ 17:40)

武井 暁子 (山口大学准教授)

「慈善活動家としてのディケンズ：Urania Cottage の関わりを中心に」

懇親会 (18:15 ~ 20:30)

会場：東京理科大学野田キャンパス カナル会館

会費：5000 円

※会員以外の方も自由にご来聴ください。



Spring Conference

Japan Branch of the Dickens Fellowship

at Noda Campus, Tokyo University of Science

研究発表 1

The Muddled State of Education and Relationships in *Hard Times*

大島 カレン (島根大学准教授)

Hard Times is often considered Charles Dickens's industrial novel. Interested in the plight of factory workers, Dickens travelled to the industrial town of Preston at the end of January, 1854, in order to write an article about a strike in progress for *Household Words*. However, the themes that first leap from the pages of *Hard Times* are ones that concern education and family. Dickens begins the novel with Thomas Gradgrind's famous lines:

Now, what I want is Facts. Teach these boys and girls nothing but Facts. Facts alone are wanted in life. Plant nothing else, and root out everything else.... This is the principle on which I bring up my own children, and this is the principle on which I bring up these children. (7)

From the very first paragraph, Dickens introduces a connection between a utilitarian style of education and child-rearing. What becomes of children brought up the Gradgrind way? In this presentation, I will explore the muddled state of family relationships and the connection between these relationships and the Gradgrind system of education.

研究発表 2

「完全なるイギリスの主婦」を目指して ——*Our Mutual Friend* から考えるディケンズの女性表象——

加藤 匠 (明治大学非常勤講師)

『互いの友』がディケンズ作品のなかで独特の位置を占める要因のひとつに、ベラ・ウィルファーの自己中心的な女性から「家庭の天使」への明確な変化が挙げられる。その際に大きな役割を果たすのが『完全なるイギリスの主婦』という家政の手引書であった。本発表においては、手引書に象徴される中流階級女性をめぐるイデオロギーを歴史のコンテクストから再考し、ディケンズが当時の女性イデオロギーにいかに対峙したかを論じていくこととする。

講演1

ディケンズの速記と人物造形

松本 靖彦（東京理科大学准教授）

ディケンズの想像力はわずかな外的特徴から人物を生み出してみせる。そのような人物造形における彼の想像力の働きには、以下のような速記的といってよい特質が認められる。

- ①全体像に替えて、局所的、断片的な外的特徴で人物を描写すること。
- ②断片的な外的特徴が、みるみるうちに全体像に膨れ上がっていくこと。

本発表では速記術をディケンズの想像力の隠喩として用い、彼の人物造形の速記的側面を上記の2点に分けて例証する。同じ台詞や仕草を繰り返す人物を数多く生み出したからといって、ディケンズはただ単にワン・パターンに陥っていたのではない。彼は複数の理由から、①のような人物造形を意図的に行っていたと思われる。②は時としてディケンズの想像力の奇異な面として受けとられることがあるが、断片が全体像へと成長していくというパターンは、読者が断片から全体像に思いを馳せる—speculateする—ように促す①と同様、ヴィクトリア朝の文化に通底している傾向でもある。

講演2

慈善活動家としてのディケンズ：Urania Cottage の関わりを中心に

武井 暁子（山口大学准教授）

本発表では、まず、ディケンズと彼と公私にわたって親しい友人であり慈善家であった Angela Burdett-Coutts が共同で行った慈善活動のうち、最も規模が大きく重要と思われる、売春婦更生のための施設 Urania Cottage の企画、設立、運営を論じ、慈善活動家としてのディケンズの一面を明らかにする。しかるのちに、ディケンズの実生活とフィクションでの fallen women の関係を検証する。

Tom Winnifrith はディケンズの慈善活動への取り組みは楽観主義に基づくと論じている。しかしながら、ディケンズからクーツ宛の書簡には、執筆活動や取材旅行の合間に、既存施設の視察、関係者からの事情聴取、大家との家賃交渉、スタッフの採用、収容者の面接など、コテージ設立時にディケンズが実務面の主要部分を取り仕切っていたことが詳細に記録されている。さらに、スタッフへの不満、ポイント制による収容者の評価システム、矯正不能な収容者の強制退去、最後の手段としてのオーストラリア移住などを書き連ねており、ディケンズが運営に妥協を許さない厳しい姿勢で臨んでいたことがわかる。このような、ディケンズの実生活での fallen women への幻滅が、逆に、小説では、例えば *David Copperfield* における Emily、Martha の新天地での再出発という形で表現されたのではないか。



